

---

# いたずら / 沖神

弥子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いたずら / 沖神

### 【Nコード】

N0819J

### 【作者名】

弥子

### 【あらすじ】

沖田と神楽の喧嘩ってきつとこんなんだ・・・

## 前編\* 沖田目線\* (前書き)

沖田と神楽ちゃんの喧嘩がこんなだったらいいよね。

っていう妄想ワールドです。今回はいろいろとひどいです。ええ。

それでも、俺に任せろ！という勇者の方はどうぞごゆっくり)\*、  
ω、\*)

## 前編＊沖田目線＊

なんだか頭がくらくらする。

最近風邪気味だったからなア・・・。

それなのに、土方コノヤローの分際で見回りなんざの仕事与えてきやがって・・・

これで明日ぶっ倒れでもしたら、近藤さんに嫌味ぶちまけてやらア・・・

いつもより重く感じる体を引きずって、公園のベンチに腰を下ろした。

温かい日差しが江戸の町を照らしているというのに、体が妙に肌寒く感じるのはおそらく季節のせいではないだろう。

・・・あ、そういえば・・・

ここはアイツとの戦場だった事を忘れていた。

もしかしたら、今日もアイツが顔を出してくるのではないか・・・。

「・・・冗談じゃねえ・・・」

こんな日に喧嘩なんてしてられるかよ。

絶対に負けるに決まってる。

俺は、アイツに負ける事だけはごめんだ。

そう思い、なかなか思い通りに動かない体をベンチからはがし、もと来た道を帰ろうとした。そのとき、

・・・ドスッ

背中に小さな衝撃がはしり、力ない俺はそのまま地面に倒れこんだ。

・・・ドサッ

『んだよ。大げさアルなあ』

そう言って、傘を肩にかつぐ少女は倒れている俺をもろともせずはこちらを見下している。

「・・・クソチャイナ」

『ちよつと傘の先つちよでつつただけヨ。  
もしかして、撃たれたと思ったアルか？』

口に手を当て、完全にあざ笑っているアイツを見上げ  
俺は体を起こした。

・・・くらくらする。

俺は地面に座り、アイツはベンチに腰かけ・・・

ってこれじゃあまるで・・・

「おいチャイナ。てめえなに人の席横取りしてんでイ」

『私は歌舞伎町の女王ヨ。愚民どもはひざまずいてればいいネ』

「何で俺がお前の手下みてえになってんだよ」

『お前は手下でも何でもないアル。使い古した雑巾で十分ヨ』

「使い古した雑巾って、もう使えねえじゃねーか」

『そーネ。もうお前はごみアル』

相変わらずム力つくなあ・・・。

俺は剣を握り締め、その時に備えたが、  
どうやら握り締める力すら、残ってないようだ。

『・・・・・・・・お前顔真つ赤ヨ。熱でもあるアルか？』

「え・・・・・・・・ああ、そーかもしれねえ・・・」

・・・・・・・・あ、いい事思いついた。

『風邪のときは早く寝ないと治らないアルよ？』

「・・・・・・・・何突然優しさ見せ付けてんでイ」

『私は最初から優しいネ！敵見方関係なくいたわるのが常識ヨ！  
あ、でもお前は対象外にしておくべきだったアルな』

「・・・・・・・・しね」

俺は立ち上がり、アイツの隣に腰を下ろした。

黙ってこちらを見つめているアイツと向き合って。

そして、次にアイツが口を開いたとき、

『・・・ッ』

俺はアイツにキスをした。

**前編＊沖田目線＊（後書き）**

後編へ続きます。

またこのパターンでしたね（＾＾）デヘ

後編\*神楽目線\*(前書き)

どうも文章量のバランスが悪すぎる・・・(´Д｀)

「要領が悪いのです。はい(´・`・´)」

## 後編\*神楽目線\*

それは、突然だった。なんの予告もなしに。

「・・・ッん」

角度を変えては、何度も口付けを繰り返すアイツ。

私は抵抗する力もなく彼の思うがままになっていた。  
体を離そうとしても、アイツの腕にすぐ捕まってしまう・・・。

「・・・ッちよ、やめっ・・・んッ」

何だよ。どうしていきなり・・・

・・・もしかしてコイツ、私の事・・・

「・・・~~~~っはぁ！」

やっとその唇が離れた時には、私は肩で呼吸をしていた。

『息してなかったのかよ』

「だ、だって・・・」

だってだって・・・

キ、キスの仕方なんて分かんないし・・・

「っ、っーか何だヨいきなり！」

『良かった』

「何がだヨ！こちらら全然気分よくねーんだヨ！」

『顔真つ赤でさア』

「え・・・あ！」

私は急いで顔に手をあててみた。凄く熱くて、心臓が五月蠅い。

「・・・やばい・・・コイツ如きに、私・・・」

『俺の風邪、たぶんお前にうつったぜイ』

「・・・は？」

アイツの顔を見ると、S特有の不気味な笑みを浮かべていた。

「・・・そーいう事かよ。」

『何期待してんだよ。チャイナのくせに』

「てめえ・・・」

何でこんな奴にドキドキしてたアルか！？今考えたらありえねーよ！  
！こんな奴絶対ありえねーよ！！

先程の気持ちとは裏腹に、心の底からふつつつと怒りが込み上げてきた。

「てめえ神楽様の唇安くみたらタダじゃおかねーぞ！返せよ私のファースト・・・」

・・・しまったッ！

そこまで言うと、私は両手で口を覆った。あからさまな態度をとってしまった自分に後悔する。

『・・・へえ、もしかして初めて?』

「し、知るかヨ!馬鹿!」

そう言つて、勢いよくベンチを立ち座っているサド野郎に向かって思いっきり蹴りをいれてやった。

『ツ・・・てンめえ』

「悔しかったらここまで来てみるヨ。病原体」

後ろ向きに走りながらあつかんべーをした。  
そのせいで、石につまずいて転ぶとは、思つてもみなかつた事で・・・。

「わぁ!」

・・・ドサッ

『捕まえた』

仰向けに倒れた私に覆い被さるようにして、目の前にサドの姿があった。

『観念しろイ。クソチャイナ。てめえは公務執行妨害で逮捕だ。  
お巡りさんを傷つけた。』

「お前その前に公務に怠ってねーダロ」

『公園の安全を守ってんでさア』

「病原菌を口移しでふりまく奴に公園の安全は守れないネ。お前が一番危険アル」

『二度目も奪ってやろうかこの野郎』

「やれるもんならやってみろヨ！」

『上等だ』

次の瞬間、公園に二つの金属音が鳴り響いた。

案の定、次の日二人が寝込む事になるといっつのは言っまでもない。

後編\*神楽目線\*(後書き)

意味不明でごめんなさい(´、`)

弥子の心は自分にも推測不可能です↑(〇オイ

次は、おまけです(^^) たぶん

## おまけ（前書き）

もはや半分勢いで書いてます。コレ大事。

おまけ

「じほっじほっ」

『お前髪乾かさないで寝ただろ…銀さんあれほど言ったのに』

「…いや、違うと思うアル。

『何か食つか？』

「…。…アイス」

『病人が何言ってるんだよ。おかゆで十分だ』

「…じゃあ聞くなヨ天パ野朗。

あれから、見事にサド野朗に風邪をうつされてしまった。

アイツからうつされた風邪だなんて…

考えただけで気持ち悪い！

…と、以前の私ならそう思うはず。だけど、それよりも今は、

ふれられた唇が、熱くてどうしようもない。

昨日あった出来事が、頭の中を走馬灯のようにめぐるたび  
これまでにないくらい胸の鼓動は大きくなる。

- …違うのに…違うのに！

必死で自分に言い聞かせてみるが、鼓動はどんどん大きくなるばかり。

- …何でこんなにドキドキするアルか…今更。  
熱でおかしくなっちゃったアルか？私…。

だって、キスとかは好きな人とするもので、

アイツが私の事…ないな。

そもそも何でアイツはいきなりあんな事…

セクハラ以外の何ものでもないネ。

他にやり方はなかったのかヨ。

コレだからドS野朗は…。

押入れの天井をながめながら、思考をフル活用させてみた。が、

正しい答えはでるはずもなく…。

『おい。できたぞ』

その声で、我に返った。

『お前また顔赤くなつてきてねえ?』

「え!?!…き、気のせいアル」

『  
そう』

でも、一つだけ確かな事は、

お前に対する熱は、しばらく冷めそうにないヨ。

## おまけ（後書き）

ここまで読んでくださった勇者のみなさま、

ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0819j/>

---

いたずら / 沖神

2010年10月9日21時51分発行